

村上天皇事記 史料百六十  
十九之四

和書門		
四〇九	一九三	函號
冊架	冊架	冊架

和史  
三八  
號甲

內閣文庫		
四〇九	一九三	和書
冊架	冊架	冊架

(六一六)

內閣文庫		
番號和	93	
冊數	409 (166)	
函號	141	131



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





光緒二十九年

封上天下...

十一月...

...

...

...

...

...

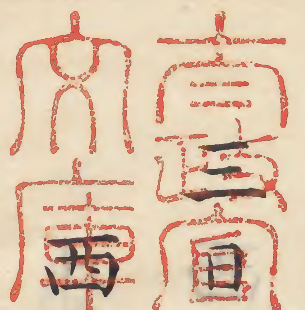


史料卷之百六十一

村上天皇事記第十九之四

十一月大 癸酉朔

康保元年十一月十日



學館院為大學別曹事



宮記裏書云康保元年十一月三日左大

臣令奏橘氏等申准勸學院等例以學館院

為大學別曹文云二諸卿定申云所請尤可

然仰依定申之旨參議好古朝臣率氏大夫



等令奏學館院為大學別曹之由慶賀之按日

本紀畧為五日  
姑從本書之詳

七日己卯小除目事

日本紀畧云十一月七日己卯小除目

西宮記裏書云康保元年十一月七日仰云

檢非違使負數佐尉志府生之間加減有前

例近則寬平七年左右合佐四人尉四人府

生二人天慶三年左右佐二人尉五人志三

二人府生四人同九年左右佐二人尉五人志

二人府生四人云二

東宮移御左近府事

日本紀略云今日冷泉東宮自内裏出御左近衛

府新嘗會之間依重服也

十二日甲申春日平野祭事

日本紀略云十二日甲申春日平野祭

十六日戊子大原野祭事



十日本紀略云十六日戊子大原野祭

十七日己丑園韓神祭事

十八日本紀略云十七日己丑園韓神祭

十八日庚寅鎮魂祭事

十九日本紀略云十八日庚寅鎮魂祭

十九日辛卯新嘗祭事

二十日本紀略云十九日辛卯新嘗祭依御物忌

不御中和院

二十日壬辰新嘗會事

日本紀略云廿日壬辰節會

江家次第新嘗會條云康保元年十一月廿

日御記曰舊例皇太子不參上之時只立其

倚子不立臺盤

北山抄云康保元年十一月廿日右大臣奏

顯忠

見參令為光仰大臣云廣平親王不候座在

御後見儀而載見參如何令申云問外記憶



之申云慥不尋舊例聞參入由入見參令仰  
以不候座親王不蒙處分輒預見參不可然  
云二

廿一日癸巳大法師淨藏入滅事

日本紀畧云廿一日大法師淨藏卒于東山  
雲居寺

元亨釋書云釋淨藏洛城人諫議大夫殿中  
監善清行之第八子也母弘仁嗟帝孫女夢天

百六十三

人入卧内因而娠寬平三年生聰敏無双四  
歲讀十字文聞一知二七歲求出家殿中戲  
曰汝欲墮三寶數當作一靈應不然不可失  
先業也兒曰嚴命豈可止諸時春初庭梅盛  
發兒出戶外召神人令折一枝來而以獻殿  
中感怪而不言以故不能拘也兒因而詰諸  
勝地事修練或棲稻荷山令神童執花水或  
渡熊野河遇洪水得異舟歲十二自松尾神



祠還寬平上皇宇多幸西郊中路見藏喜而為身  
子勅上叡山登壇受戒宣云昭法師稟密教  
又從大慧法師學悉曇章慧者安然之上足  
也藏元通絲竹故於悉曇深究淵奧藏夏橫  
川如法堂一夕旋庭俄有異人自西方來藏  
問誰答曰我是賀茂明神也昔慈覺大師令  
京畿二百餘神番護此經今日我之直也庭  
下有穢我欲責之而師之所為也我不能如

何便召神人穿去其地方五尺餘延喜九年  
左僕射藤時平受管靈之誅沉病彌留請藏  
持念白晝二龍青色從僕射左右耳出頭諗  
善諫議曰我告天帝報讒怨而貴子藏公法  
力抑我乞加嚴誠諫議令藏潛去纔出門僕  
射即薨沙門長秀從波斯國猛風迅漂來秀  
有胸病醫治不効白增命僧正索法救命曰  
我國靈感之者十人淨藏第三也遣之藏誦



藥師咒百八遍秀疾立愈秀感伏曰我國隣  
印度未有如是異人今見此師豈有一二乎  
天慶三年正月勅於橫川修大威德法降逆  
賊平將門于時將門帶弓矢立燈燄上伴僧  
皆見須臾流鏑聲指東而去朝庭又修仁王  
會厭逆寇藏為待賢門講師其日輦下俄傳  
平賊入都朝野擾動藏奏曰不是其身只頭  
而已果驛傳賊首至京師天曆中藏寓八坂

寺時搢紳多集見塔曰塔之傾斜也其方有  
凶今是塔傾向王城為之若何藏曰我又思  
之早可修治群公以為捨財也其夜藏坐露  
地向塔持念已還房弟子仁瑤偶出庭微風  
自西北來塔婆少搖寶鐸作聲朝見之塔婆  
端直都人走眎隨喜嘆嗟藏在此寺時中夜  
賊數十人來藏厲聲叱之群盜支躄不動猶  
枯木蓋咒縛也天明藏解縛群賊作禮而去



南院皇子令人修除病法過三日皇子薨哀  
訴于藏藏以火咒加之皇子蘓息正服而  
禮藏藏出語人曰皇子命盡矣我只咒力令  
暫蘓耳四日遂薨醍醐公主有腰疾起居不  
便召藏持誦藏日中出壇呼曰公主病愈侍  
女驚見公主起行或嚬袈裟藏披之口出火  
燒之内衣不焦或問所由血穢婦人之剪裁  
也天德中神人告終藏誦金剛般若經祈延

命俄患風數日而痊蓋轉業輕受也應和三  
年八月空也法師於六波羅密寺慶讚金字  
大般若經多會名德時乞丐者夥焉其中有  
比丘形者藏見之大驚延之上座是人辭  
又不言藏以一盂飯与之飯可四斗食之皆  
盡藏又薦飯又盡之衆人怪比丘多食悉見  
之滄已藏揖而送之去後所與之飯如元不  
散或問之藏曰文殊師利之應化也一會歎



伏康保元年十一月二十一日化雲居寺壽  
七十四藏博物顯密悉曇天文易筮醫卜絃  
歌文章伎藝莫不貫搆而皆拔萃昌泰帝修醍醐  
佛名會勅藏為梵唄沙門平塞潛嘲之會已  
上詔侍中藤公忠宣塞曰藏之音韻非凡調  
汝等學之應後會塞愧恐承平太上皇有病朱雀  
藏筮曰上皇疾易差而明年宮中有栢梁之  
災果如言嘗曰我一生間受三竒拜寬平上

皇始者四海日域之主後者三日月輪之尊  
又我本師也昔更衣妃受狂病鑿巫拱手奉  
勅入宮護法神先我降縛妃疾即愈我尋而  
入上皇起而拜我一也故殿中監者朝廷才  
臣儒林望士亦我嚴父也我詣熊野殿中薨  
背中途聞訃而馳歸已經五日待我未窆我  
動冥衆加持蘓息殿中著位袍而拜我後七  
日而永逝二也玄昭法師者顯密偉德朝野



碩望復我阿闍梨也於亭子院修法真濟之  
靈為鵲來現昭投爐壇燒之因而結怨化異  
小僧自空降來昭見之心身惱逼我加持之  
降伏彼靈昭披法服而拜我三也此三拜於  
我已邁餘何言乎按他記淨藏事者不可枚  
舉而不如本書簡明仍舉  
其全文下所引諸書皆取  
其要以補本書之所漏已

又云藤太主源太主二人居和州吉野郊布  
衣烏帽辟穀而持密咒淨藏法師欲渡吉野

百六十八

河會瀑漲無舟楮節而躊躇時二人飛來曰  
待我試咒力藤太主持念須臾神人伐大木  
載藏源君又令神人牽其木著河岸二仙謂  
藏曰非師爭感我二人哉言已飛去  
扶桑略記云十一月廿一日酉時定額僧淨  
藏入滅年七十四臨終早朝云命終之期今  
日既到乃於東山雲居寺專任正念對西念  
佛及黃昏時安坐遷化俗姓三善朝臣右京



人也參議從四位上宮内卿兼播磨權守清  
行第八子也母嵯峨皇帝孫也出家以後凡  
顯密悉曇管絃天文易道卜筮占相教化醫  
道修驗陀羅尼音曲文章種二才藝悉以拔  
群不違乞舉又於金峯山安居行業修畢還  
向之路宿丹治坂下人家家女悲泣問其由  
緒答云婦夫腹中脹滿三年辛苦遂以亡沒  
已經三日哀其悲歎乍立加持腹中污穢令

其護法踐出鼻杳滿室即以甦生又詣長谷  
寺為正月導師時自伊賀國參男俄拔太刀  
狂亂滿堂騷動爰淨藏暫置如意作本尊印  
狂人被縛終夜打著禮堂之柱教化竟畢解  
男數年鬼病一旦平痊佛法威驗不測量  
又云延喜九年四月四日左大臣藤原時平  
薨病病之間內供奉十禪師相應師檀之契  
年久然為恐怨靈无懇切加持爰請善相公



男僧淨藏令加持矣中爰淨藏依父之誠退  
出已畢則時左大臣時平薨件左大臣之家  
室者禪定法皇宇多之妹也明日法皇自仙家幸  
其第則奏淨藏退出之由淨藏者是法皇之  
弟子也不致終始加持之旨深以勘責仍淨  
藏為恐勅勘籠居横川首楞嚴院三箇年間  
苦修練行或時使者現形打鐘摘花人驚耳  
目山厨絕烟飡霞隔日爰楞嚴院僧延豐頗

百六十一

有温潤可送齋飯之由亦含然延豐稱无合  
米、房去畢其後護法取出延豐所納白米  
三石蒔散近邊山谷已訖本主後悔再三歸  
伏由之如本納置按光孝皇女無  
配時平者可疑  
古今著聞集云淨藏法師之居人こゝろあり  
行者や葛木山よりありけり以重別山乃谷  
小大なる死人のうらをまきり願ふ是法、  
きくくふりあり岩まきくく石成樹



ちりも一獨結と云きりぬり年を也さ  
いさし一ささめだきり浄花たふあや  
しそそ其谷一留くたき何人のかき  
つふ年と云く人と存きし新強一ける  
才五日乃夜着ふ人告くつこく八汝者乃  
骨也速く一か持しそ彼獨結と得言さ  
中つふさめてかく移し向くおとらあか  
持しふふか移しそ移しそ移しそ移しそ移し

つりく常哉用の中獨結と浄花たは  
くかり其後新と積くくつてう  
石の率都婆とあきり件のそふ今に  
彼谷一りりもあきり浄花たはあ  
人ちりしつふ年と云くぬ又比叡山横川  
しそそ其谷一留くたき何人のかき  
つふ年と云く人と存きし新強一ける  
才五日乃夜着ふ人告くつこく八汝者乃  
骨也速く一か持しそ彼獨結と得言さ  
中つふさめてかく移し向くおとらあか  
持しふふか移しそ移しそ移しそ移しそ移し



護法より我ありて花をとりあを汲  
後仕り修きり因任山如法の本一や  
七月十五日安居れおるお給くを新  
けふ朗岳和尚乃弟子に修入より入んこ  
しあは人を強者より修ひはまうりまは  
原一護法とははけきり貴六乃つひ  
先淨苑出りぬり次修入おくるわん淨苑  
云々年七歳より父母乃しをるを出  
百六十二

山林を家より雲霧と志す物より不  
身とくをきおふんをついを福んこ  
後一肝膽茂くすす身命を  
おまはるれあへ名利乃あまは  
是上喜抱乃あめなり我と志すは  
くれ石わををたしは主時くれ石  
死あまおちらけ本鞠乃し  
修入しはくれ石はおまはる



まや〜高居経る中〜詞も経る〜別去のまゝに  
大威徳咒と〜増加持と〜保〜  
らう〜淨氣又云命命は〜奉福師  
にはひ〜まつ〜福師の業年より  
観念よりひ〜好き〜大威徳と〜保  
と〜に在せれ摩訶迦葉と〜  
孫と〜母〜  
あ〜は〜二寶の神明と〜

ありや〜つひ〜常在盡誓山乃句と〜  
うれ夢雲と〜ひ〜笑人心肝と〜  
ま時〜の石又動た〜  
月〜れ〜友人乃ま〜  
ふ序とた〜  
な〜  
撰集抄云〜  
算大徳同朋扱〜



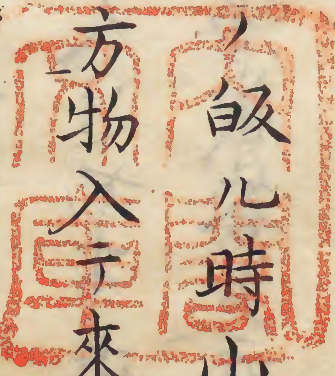
修好一 結けあふ天下日てを事すへく  
後を起志の川なほと名千うらたてりえつら  
るし物おりく侍学志ふあまも佛并乃出  
助すや侍あ人を印あ或山中に清みれを  
けふと告うりてをさあうりもあ川すうそ  
汲あふ之或女れあをさうら事ゆけを  
仲身方佳はさ結りちと喉うらあかん  
とあふりこの女云換貴けらるる重なるは

わーおー飲結へー我ー告く乃あかん  
わーくー汲く物と乞結へーくうらあ  
ーくーけくさば大さけく也くく水  
けくーく飲を舞く山乃君は乞あ  
て河くぬく心のあさく結あけ  
さくさまう涼く清くあれ滝おくく  
流あけりけりあかん乃清あくく  
たーぬきの里くさく回くくく



え中あさの志ふさつこゝもなめ  
あつては後ひつりおの目てつとと  
侍けるおきさつある御く浄蔵先  
おまじけり此法ありおまじと  
我とけり法縁をんく又その成  
まらぬまけけつと先乃らり少  
清なる流りけりさつとんぬ  
るをぬめりぬりけり人

古事談云浄蔵貴所住山ノ時飛鉢法ヲ行  
鉢ヲ飛テ過ケル頃三日間鉢空ク飯來ケ  
レハ依不審四日ト云日鉢ノ飯ル時山ノ  
峯ニテ見ケレハ我鉢自都方物入テ來ヲ  
自北方他鉢來會テ此鉢ノ物ヲ移シ取飛  
去ケリ浄蔵即加持メ鉢ヲ飛シ其鉢ヲシ  
ルヘニ北方凌雲霧テ分飛行又早二三百  
町モ來又ラント思程ニ谷合ノ清水流テ





コノモシキ所ニ有方丈ノ草庵松風スコ  
ク響テ砌ニ苔深ク幽玄ノ所也庵ノ内ヲ  
見レハ老僧一人脇息ニ凭續經シテ坐セ  
リ夏ノ体非只人此人ノシワサナメリト  
思フ間ニ彼僧見付テ云何人ソヤオホ口  
ケニテハ人不来所也云々淨藏答テ云住  
叡山行者也然ニ依無活計此間飛鉢メ罷  
過ノ處ニ此兩三日ノ子細如此為愁申所

叅向也云ニ老僧云イト不便ノ夏ニコソ  
侍ナレ一切不知侍可相尋トテ微音ニ人  
ヲ喚ニ出来ル人ヲミレハ着唐裝束天童  
也僧云此僧ノ被仰夏ハ汝ノシワサカイ  
ト不便ノ夏也自今以後不可有ト諫レハ  
童頗赤面シテ退去了今ハヨモサヤウノ  
夏侍シトイヘハ淨藏欲退歸處ニ僧云ハ  
ルニト分来給定テクルシク御坐覽暫



可奉饗應トテ又人ヲ呼テ此御房ニ可然  
物マイラセヨト有ケレハ天童瑠璃ノ皿  
ニカラノ梨子ノムキタルヲ四果モリテ  
扇ノ上ニ置持來ケルヲ先一果服スルニ  
天ノ甘露モカクヤト覺テ忽ニ身モスミ  
シクツカレモナラリケリ其后飯テ住房  
了鉢ノ物ウツシトル更止又ト云々  
又云白山權現住給山ニ有池相去御在所

事卅六町在深山中縱横七八段許云ニ号  
曰御厨池諸龍王相集備供養之池也件池  
人敢不能近寄若有臨寄人之時雷電猛烈  
害人云ニ仍從古來不能近進而淨藏及寂  
澄聖人等申請權現汲取此池水云ニ  
高僧傳要文抄淨藏傳云亭子院殿上法師  
寬修示雜事還行之處見其背呼歸云不幾  
可滅度可勤彌陀念佛云ニ經一月之後亡



逝畢又中算大法師父見歸去背呼云相會  
只此度也亡逝之期已近云云歸後十餘  
日早逝畢中算大法師又見件事奇思問之  
答云汝有貴相定成國寶乎但壽三十七也  
懇切祈請過歟四十二者必死事也者無過  
亡逝已畢又圓成寺修或殿上法師四十九  
日羯磨坐殿上法師有數十其中見能淨君  
示諸僧云件能淨忽焉可頓死者乘車出大

門則死畢又野中安行為官使部參入示云  
汝有五品相可用意者如事成五品任參河  
守如此占相不可毛舉

羽賀寺緣起云天曆二年戊申雲居寺之淨藏

一夕境界之中有人告曰若狹在靈地其名  
曰羽賀山崩沒堂閣廢平不久汝去興之為  
世勸福于茲淨藏瓶鉢得之尋此山嶽路當  
歷遠敷托阜丘望見瑞氣氤氳昇恰如引練



藏師來此鑿地不幾尊容果得泥中今日氣

起者瑞氣起所也淨藏此達天聞請復勅願

之場帝大有勸感下勅勅功其制增舊尤厚

江談抄云葉二者高名橫笛也号朱雀門之

鬼笛是也淨藏聖人吹笛深更朱雀門鬼大

聲感之自余此笛乎給件聖人云二按續教訓抄同

之

十訓抄云博雅三位月ノアカミリケル夜

百六十九

直衣ニテ朱雀門ノ前ニ遊テヨモスカラ

笛ヲ吹レケルニ同サマニ直衣キタル男

ノ笛吹ケレハタレナラント思程ニ其笛

ノ子此世ニ類ヒナク目出タク聞ケレハ

アヤシクテ近ヨリテ見ケレハ未見又人

ナリケリ我モ物ヲモイハスカレモ云事

ナシ如此月ノ夜コトニ行アヒテ吹事夜

頃ニナリ又彼人ノ笛ノ子殊ニ目出タカ



リケレハ試ニカレヲ取カヘテ吹ケレハ  
世ニナキホトノ笛也其後ナラミ月頃  
ニ十レハ行アヒテ吹ケレト本ノ笛ヲカ  
ヘシトラムトモイハサリケレハ永クカ  
ヘテヤミニケリ三位失テ後御門此笛ヲ  
メシテ時ノ笛ヲキ共ニ吹セラルレト其  
音ヲ吹アラハス人無リケリ其後淨藏ト  
云目出夕キ笛吹者ケリ召テ吹セ給ニ彼

三位ニオトラサリケレハ御門御感有テ  
此笛ノ又シ朱雀門ノ邊ニテ得夕リケル  
トコソキケ淨藏此所ニ行テフケト被仰  
ケレハ月ノ夜仰ノコト夕彼ニユキテ此  
笛ヲ吹ケルニ彼門ノ樓上ニ高ク大ナル  
音ニテ猶一モ子カナトホ忍ケルヲカ夕  
ト奏シケレハ始テ鬼ノ笛ト知食ケリ葉  
二ト名テ天下第一ノ笛也  
按博雅以天元  
三年薨後於淨



藏十六年本  
文必有誤

續教訓抄云或記云淨藏ト云人月ノ夜笛  
ヲ吹テ朱雀門ヲスク時ニ鬼アリテ和之  
淨藏吹止ハ鬼モ又吹止カク處又ト久ス  
ル事再三ノ上人云ク是何人ソ子カハ  
クハ謁スル事ヲエシ鬼應シテ云ク大徳  
ノ妙曲ニ感シテ一聲ヲ發ス形體ヲアラ  
ハサハ定テ怖畏シ給ハム歟ト云ク上人

百六十一之廿一

サラニ其儀アルヘカラサルヨシヲシ  
メシ給フアヒ夕鬼ツイニ出タリコレヲ  
ミレハ暴虎威猛ノ勢心魂キエ又ヘシ然  
而上人カツテ恐ルニ色ナシ月徘徊四道  
皓然兩笛寥亮又吹之鬼ノ笛代ニ絶タリ  
凡竹ノヲヨハサルトコ口ナク夜ヤウヤ  
ウ微明ニ向テ鬼笛ヲトテ急キ去又強ニ  
追トモセズ翌夜又件ノ笛ヲ吹テ彼門ヲ

百六十一之廿二



スクルニ鬼感シテ云クナヲキヤツハチ  
カラヲヨハヌモノミ音カナト云々此淨  
藏ハ三善清行宰相ノ男ナリ横笛ノ上手  
尾張濱主カ弟子ナリ空ニ物ハ音ヲシレ  
リケリ村上ノ御宇御導師ニセブレケル  
ニ禮盤ニノホラムトスルトキコヨヒ人  
御導師平調ニツカマツレト宣下セラレ  
タリケレハシハシハカラヒテニ禮ヲシ

イタシタリケル音ヲミスノウチニ平調  
ニシラヘラレタル箏ヲカセ給タリケ  
レハ御手ヲサシ入テカキナラサセヲハシ  
マシタリケルニスコシモ夕カハサリケ  
レハコレハアリカタキ事ナリトソ申ッ  
タヘタル  
又云和風樂或記云此曲春ノ曼陀羅會ノ  
夕メニ延曆寺僧淨藏カ所作ナリ舞師船



木望真舞ヲ作り喚頭アリ秋ハ送秋樂ヲ  
奏ス此曲第一ノ秘説ナリ送秋樂モ淨蔵  
ノ所作也又云此曲淨蔵大徳カ所作ナリ  
天台山ノ舍利會ニ奏之彼舍利會ハ清和  
天皇御宇貞觀元年ニ始行之或秘記云久  
承和九年<sup>壬戌</sup>宸遊外從五位下尾張濱主<sup>生</sup>  
百十和風樂ヲ舞ノ勸賞アリ入内ナリ此  
四曲濱主承和年中ニ舞事分明ナリ淨蔵氏

百六十一之三

寛平三年辛亥歳生セリ時代多クヘタ  
レリ日記ノ如クハ已ニ是古曲也淨蔵カ  
作ソラ事トイフヘキ歟重國史ヲ檢ルニ  
濱主和風長壽樂ヲ作ルナリ然ハ淨蔵カ  
作相違歟  
體源抄云小蟬ハ其竹ハ笛也元ハ淨蔵ノ  
笛也件ノ笛傳テ小一條院ニ候ケルヲ傳  
傳シテ三宮ニ候ケリアサヤカナル笛ノ

百六十二之四



蟬三筋アサニミトシテ付タリキ猪クヒ  
ヲラレテ吹穴ヨリ下ハ鹿角ヲモテ付タ  
リケリ彼笛仁和寺ノ大教院一品宮ノ御  
所焼失ノ間焼畢其時武吉カ白笙又時元  
カヲキナ丸ニツナカラ焼了件ハ小蟬ハ  
下總前司師季ノ曰ラウヲモシニ入ル  
時頭ソレテコカシテソ侍リケル  
大和物語之中奥のを江乃すけくむす免

このまふまゝいゝまゝ  
あんなやにーかろろまゝ人あゝい  
ふまゝいゝまゝあゝまけまみひてあり  
なまゝおち人ろものいゝまゝいゝまゝ  
ねまゝいゝまゝあゝいゝまゝいゝまゝ  
まゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ  
あゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝいゝまゝ



幸いし哀おたわすく終ひたりけり  
ゆ〜事おこつ〜さるるはるみらんみえ  
け〜さうらり〜あひ〜りてみまは  
け〜おふ人の母なるまはけ〜は後撰書  
條のら〜ぬれ〜り〜た〜か〜  
〜た〜あ〜ん〜あ〜け〜ら〜あ〜な〜  
〜さ〜は〜し〜思ひ〜〜た  
よりとおろすすり〜あ〜か〜け〜は

百六十之廿五

又都り侍〜た〜り〜あ〜て又山〜  
〜り〜たり〜た〜あ〜か〜  
思ひ忘〜る〜  
あ〜あ〜〜は〜も君忘〜る〜  
あ〜の〜あ〜い〜あ〜ん〜け〜又  
さ〜ら〜た〜〜我〜  
を〜ら〜ら〜れ〜た〜も〜あ〜ん〜  
〜い〜〜あ〜あ〜か〜



きらかんきらめよりひねくしみる  
らん〜ありきき〜かれとちなり〜いて  
き〜けきはがや〜み〜あり〜あり  
又按

見今昔  
物語

又云乃〜きんのきみ〜ひかり人浄光  
〜た〜あり〜中なり〜け字派あり  
ち〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり  
〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり

む〜れ人ふあり〜あり〜あり〜あり  
〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり  
〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり  
〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり

拾遺集云ある人の〜あり〜あり  
浄光師浄光書〜あり〜あり〜あり  
〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり

門葉記云如法堂靈異記云抑故浄藏法師



世習難斷戒行雖闕持明之功近代飛名聞  
其德行猶非凡人彼傳云天曆六年淨藏法  
師登橫川一夏苦行每日詣如法堂備香花  
供為子反之禮常思念我酬宿善今得人身  
同為沙門願密拜大師御經永可消无始之  
罪障云二即欲用件御經于時有一小僧俄  
出現陳曰昔日慈覺大師為救六道群類數  
年被練行手自書寫之恭敬抽慙懃奉納此

伽藍依之比叡山王赤山明神番二守護晝  
夜无懈而今汝以咒申之驗德恣欲開見妙  
典尤愚也甚拙哉形雖似佛子即同外道早  
可成慚愧深可發露汝若不止此邪念普匪  
背誠抑可責云二法師卷舌敢不及并云二  
三國傳記云中比善相公三善ノ清行ノ子  
息二淨藏貴所卜云テ貴キ僧アリ父ノ大  
臣三綱五常ノ文道ヲ教ヘ周公孔子ノ聖



徳ヲ継セント思テ或公卿ノ娘問名約束ヲ  
成シ成人スルヲ待處ニ淨蔵ハ幼少ヨリ  
道心深ク出家斗藪ノ身トナルヘキ旨ヲ  
思定ケレハ乞食ノ形ヲ學テ彼ノ女性ノ  
三歳ニナル時乳母ノ懷テ門庭ニ出タリ  
ケルヲ利劔ヲ持指シ貫テ密ニ舐テ煩惱  
ノキツナ切リタリト思ヒ十七歳ノ春忽  
ニ出家メ山林求道ノ行者ト成ル凡ソ一

陀羅尼ノ功力深ク法華讀誦ノ薰修積レ  
リ大峰葛木ノ苔ノ上ニハ敷霜致苦行金  
峰熊野ノ巖ノ下ニハ戴星誦法華是以テ  
玄冬白雪ノ朝ノ嵐ハ徹衲衣片袖之膚九  
夏三暑ノ暮ノ勤メハ摧練行辛苦ノ骨密  
壇深岨ノ中ニハ雲分茅屋柴戸ノ半間座  
禪床石ノ上ニハ雨濕藤麻苔袖ノ三衣或  
ハ白雲帶花緑松並梢深山之嶽或ハ猿猴



叫雲飛泉灑巖那智ノ峯ニ至拾新高キ嶺  
ニハ成上求菩提ノ觀汲水幽谷ニハ凝下  
化衆生ノ念其後淨藏貴所ノ威驗高德天下  
無双ナレハ常ニ禁裏仙洞ニ參内メ玉體  
安寧ノ加持ヲ致ス爰ニ朝藿向曦霄蛾拂  
燭志モ有リケルニヤ大裏ヨリ或ル女房  
ヲ下サレタレハ撫摩懷抱昵ヲ成メ二人  
ノ子ヲ儲ケタリ彼ノ女姓ノ身ニ痕ノ跡

アリ是ノ謂ヲ問ニ女ノ云ク我聞ク三歳  
ノ時乳母ノ庭上ニ出テ花ニ戲ケル處ニ  
一人ノ乞食來テ劍ヲ以テ誤レルナリト  
答サテハ昔我カ犯シタリシ所ナリト先  
業宿執難断理ヲ悲メリ雖然小野ノ葦建  
立ノ八坂ノ塔ノユカミタルヲハ淨藏二人  
ノ子ヲ膝ノ上ニ居ナカラテ祈直セリ豈世  
ノ愛着色貪ノ義ト同シカラシヤ直ハ



帝王編年記云天曆八年淨藏加持直八坂  
塔傾亂行之後事也。有子息二人。一人者出  
家修驗者。一人者幼少昇殿寵幸者也。為式  
部大輔文江朝臣子。  
高僧傳要文抄淨藏傳云所生之子有男子  
二人矣。一人出家入道才藝修驗異於他人  
修行之次於奧州早亡逝。一人者天曆之代  
幼少昇殿寵幸殊甚。隨分管絃頗以無耻童

百六十一之冊九

雅名曰市姬。及于成人。令列伯父式部權大  
輔大江朝臣之子。即名謂興光。聖人所作不  
可効之不可測量者也。

廿五日丁酉賀茂臨時祭事

日本紀略云廿五日丁酉賀茂臨時祭之間

三十日壬寅為故式部卿重明親王賜度者事

西宮記云康保元十一卅賜重明親王沒後

是度者三人



是月栽南殿櫻事

禁秘抄云南殿櫻是大略從草創樹歟天德

三年正月又被栽同三月有花宴兩度之間

二年正月又被栽同三月有花宴兩度之間

廿一重明親王家樹一自西京移栽之按又見河海抄

古事談云南殿櫻者天德四年九月廿三日內裏

燒亡二燒亡了仍造內裏之時所移植重明

親王式部卿家櫻樹也件木本吉野山櫻木云

賜日十二月小 癸卯朔

二日甲辰於左近陣座諸卿有一種物興事吉野

日本紀略云十二月二日甲辰諸卿於左近

陣座有一種物事

四日丙午置皇后安子山陵并充陵戶事

政事要略云太政官符治部省皇后山陵壹

處今上皇后右大臣藤原朝臣師輔之女也右山陵奉置山城國

宇治郡小栗栖鄉木幡村者從二位行大納



是言源朝臣高明宣奉勅宣依例下知所司者  
省宣承知依件行之符到奉行左少并紀朝  
臣左少史并原康保元年十二月四日刻宣  
又云太政官符山城國司應充假陵戸伍烟  
事右宇治新陵新所仰如件國宣承知依件  
行之但限十箇年依例相替符到奉行左少  
并紀朝臣左少史并原康保元年十二月四

日十二月四日刻宣

賜左近權將監石野善根兼字事

類聚符宣抄云左近權將監正六位上石野  
連善根誠恐誠惶謹言請特蒙天恩准傍例  
被下宣旨如本兼任備前史生狀右謹檢案  
內善根為將曹之間依恪勤之勞以去應和  
二年十二月兼任件國史生以同三年二月  
給官符也爰以今年三月廿七日轉任權將  
監方今謹案傍例為將曹府生之間兼任諸



國史生之輩轉任將監將曹之後皆被下宣  
旨如本兼任蹤跡無絕望請特蒙天恩被下  
宣旨如本兼任將知奉公之貴彌盡忠節之  
誠善根誠恐誠惶謹言康保元年九月十五  
日左近衛權將監正六位上石野連善根從  
二位行大納言源朝臣高明宣奉勅左近衛  
權將監石野善根兼任備前史生宜如本兼  
任康保元年十二月四日大亟紀奉

七日己酉給藤原忠輔等學問料事門前道長文三

葉黃記云蔭位年齒等事康保元年十二月

七日己酉穀倉院學問料可給二人之處三

人競望之中藤原忠輔國光朝臣男大菅原

輔昭文時朝臣男三統篤信故元夏宿祿男等也而以在

衡卿孫忠輔被給之輔昭篤信等之間宜定

申有才學問之者而篤信隨召奉試頗免疵

瑕儒已進舉狀仍篤信忠輔共給之至輔昭



年齒最幼相次可定補按西宮記為三神

西宮記云康保元十二三篤信忠輔二人給

學問料神皇正統記卷之四十四

九日辛亥授大法師元杲付法灌頂事西宮記

東寺要集云太政官牒東寺應聽付法灌頂

傳燈大法師位元杲年五十四真言宗東大

寺右得僧正法印和尚位寬空去月廿七日

十奏狀稱謹檢案内密教灌頂法門者蓋是菩

薩大士究竟至佛之道也於此法門有其二  
種一結緣二傳法也其結緣者即是普令一  
切衆生結善緣於現世期大覺於當生者也  
故人之賢愚器之大小不須撰定只競進者  
以授之其傳法者又是待教授於後進法智  
行於先賢者也故難而不許撰器於切瑳秘  
而又傳待價於珠玉抑件二種灌頂依去兼  
和十年十一月十六日官符始行經年只結







行之牒到准狀故牒康保元年十二月九日

右少弁正五位下紀朝臣左大史正六位上

栗田朝臣清明牒按據政事要畧右少弁疑左少弁之誤

十日壬子御躰御卜事按據政事要畧右少弁疑左少弁之誤

日本紀畧云十日壬子御躰御卜

僧增賀於多武峯法華堂始修三昧事

多武峯略記云後記云康保元年三月村上天皇建法花堂同年十二月十日增賀上人

天皇建法花堂同年十二月十日增賀上人

百六十一之卅六

移修三昧於此堂矣

十八日庚申賑給事

日本紀畧云十八日庚申兩京賑給

十九日辛酉御佛名事

日本紀畧云十九日辛酉御佛名

廿二日甲子荷前事

日本紀畧云廿二日甲子荷前止長岡陵加乙年漏

先皇后陵按類聚符宣抄為廿日疑脫二字



類聚符宣抄康保二年正月宣旨云藤原朝

臣親賢小野朝臣奉時菅原朝臣輔正件等

廿侍從闕去年十二月廿日荷前使云二

廿九日辛未追儻事六百辛酉

十標囊抄追儻條云雨儀康保元嘉保二

僧又云人三不參例康保元參議不參

是年僧良源奉為主上修功德事

慈慧大僧正傳云康保元年依綸旨為公家

百六十一之卅七

修功德矣結願之日加持之間補內供奉十

禪師右大將師尹卿於御前傳勅命殊常之

恩古今無比也按又見後拾遺往生傳

東宮學士元夏卒事

勅撰作者部類四位部云三統元夏東宮學士式

部大輔理平子至康保元年按元年本作三年據下所引葉

黃記文改之

類聚符宣抄云蔭子從七位上三統宿祢元



夏右左大臣宣奉勅件人宣仰式部省令奉

忠平

中

文章生試者延長七年八月廿一日

又云右大臣宣奉勅文章得業生三統元夏

恒佐

據文章博士大江朝綱等奏申請之旨非無

其由特不滿年限宜令遂課試承平七年二

月十五日左大臣宣宜令備後權守管原朝

仲平

臣在躬問文章得業生三統元夏方略之策

者承平七年二月廿九日

百六十之卅八

百六十之卅九

外記日記云天慶元年七月十六日辛酉大

納言平伊望卿參議左大辨源是茂朝臣著

左仗座令奏復任召名復任宣旨奏聞之後

召式部少丞三統元夏給有相朝臣召名二

年十一月十四日辛巳主上始讀史記博士

朱雀

左中辨藤原在衡朝臣尚復式部丞三統元

夏等也四年九月十九日丙子此日郡司讀

奏也云二先是式部大輔兼右大弁藤原在



衡朝臣大丞三統元夏略中等依例被候日華  
門外北腋床子座五年閏三月一日甲申有  
除目召名之事但今年叙位停止之歲也而  
至於除目之日拔叙之人五人也其則藏人  
式部大丞源信明式部大丞三統元夏民部  
大丞藤是守等叙從五位下略中即皆被并於  
受領之官也  
本朝文粹橘直幹款狀云天曆四年三統元

百六十一之卅九

夏從式部少輔除儒職之日不罷少輔被賜  
兼字  
二中歷云文章博士三統元夏天曆四二從  
上  
類聚符宣抄天曆四年四月十四日款狀從  
五位上行式部少輔兼文章博士三統宿祿  
元夏  
御産部類記引九記云天曆四年閏五月二



日戊辰晚喚七箇日讀書博士式部大輔紀  
朝臣在昌少輔三岑宿祢元夏大學頭橘朝  
臣敏通但明經博士十市良佐稱并侍醫櫻  
井宿祢李富陰陽權助秦連茂右近將監三  
島真祥等給酒肴而給祿在昌朝臣蟬翼朽  
葉色小褂袴一具三人博士各白張細長一  
襲袴一具但良佐宿祢差息、遣  
之○按三岑宜作三統  
西宮記裏書云九記云天曆四年十月八日

百六十一之四十

諸司裝束如常午二刻御南殿實賴左大臣奏云  
令獻題之由召仰參議師氏云了博士等  
進立大臣後大臣仰云題獻禮博士等唯跪  
大臣取硯筥授直幹直幹給之書題獻大臣  
大臣進奏聞上仰云可用直幹題但以元夏  
令付韻者大臣復座令付韻奏聞御覽了大  
臣歸座問直幹云可作序之人誰乎申云直  
幹元夏間隨仰可作大臣仰直幹可作之由



昨日召元夏私問云序作事上卿所定仰歎  
將博士等所定申歎元夏云先例九日序隨  
策次第云二若策次第元夏  
可作依膺次直幹可作云二

博士歸座云二  
文人等獻詩之後樂了元夏經舞臺西取文

臺宮立東階下中略上仰可召博士等之由大

臣仰參議維時召之博士等進候南廂東第

三間大臣召元夏為講者天皇授御製大臣

進給之撤臣下詩等令讀御製云二讀詩了

王卿博士等歸座按是殘菊宴會儀也下二書亦同

又云吏部王記云天曆五年十月五日午後

參入上已就御座云二式部權大輔維時朝

臣召左大弁朝綱式部少輔元夏等令獻題

奏覽更給御題仰朝綱勒韻字云二

政事要略云天曆五年十月五日文章博士

橘朝臣直幹依勘事不參入仍召左大辨大

江朝綱朝臣堀下第一博士三統宿祢元夏

等令獻題但此度依有御題不用博士等所



獻之題其題云藜香近菊籬以長件韻字有

勅朝綱朝臣所付進也七年十月五日文章

博士橘朝臣直幹三統宿祿元夏等獻題而

依不叶天意更又令改進了其題云花寒菊

點藜云二

日本紀略云天德元年十月三日丙辰於式

部省有文章生試當日少輔元夏給御題水

清玉潔

二中歷云學士侍讀冷泉紀在昌天曆四三

統元夏天

葉黃記云蔭位年齒等事康保元年十二月

七日己酉敕倉院學問料可給二人之處三

人競望之中藤原忠輔國光朝臣男大菅原

輔昭文時朝臣男三統篤信故元夏宿祿男等也而以在

衡卿孫忠輔被給之輔昭篤信等之間宜定

申有才學問之者而篤信隨召奉試頗免疵



瑕儒已進舉狀仍薦信忠輔共給之至輔昭  
 年齒最幼相次可定補詔書其言奇之問其  
 貫之集云或於巫みむののえ夏うひん  
 かなるとなりには位をめてかくち隣ある事  
 をいとおとせあるはのよみくをくはる  
拾遺  
 梅の花匂ひのぬくえはるはまのよりの  
 をきりりるるこつるへむもみふま  
 ちりりるるをきりりるるをきりりるる我

百六十之四十三

1061-1318

やなむあは



史料卷之百六十



史册編之臣深状仍篤信忠輔共給之臣輔昭

年齒最幼相次可定補

貴之集云武於西みわの元夏のひん

たすりありに任りてかくれ

をいひむをまゐりけりしよみ

梅のむらひのぬく入をけり

を言てけりなることいふ

かたはれは





